

あたまを耕すー2

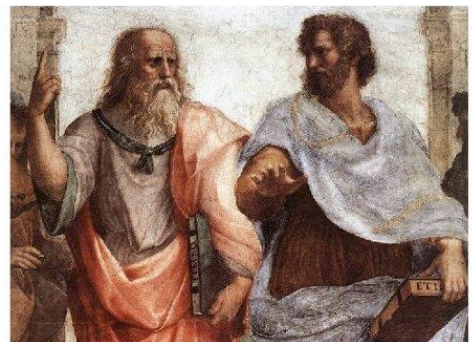
楽しかった大型連休も終わり、青葉若葉の季節になりました。以前大学で教えていたとき痛切に感じたことですが、5月の連休が終わると学生たちのやる気が急激に萎えるのです。これは一ヶ月の学生生活の結果、「大学って、思っていたのとだいぶ違う」と落胆することが最大の原因でしょうが、同時にこの頃から蒸し暑い気候になるということも原因かと思います。そこで、「蒸し暑さが本格的になる6月の中頃にもう一つ連休があればいいのに」と思ったものです。しかし、休みを作るというようなことは学校の先生にはできません。会社の社長でもだめです。さらに言うと市や県の政治家でもだめです。そのような改革ができるのは、国会議員と政府で働く政治家です。政治というものは、一億人に命令できる力を持っているのです。ですから、それがよいものか悪いもので、大勢の人が幸せに、もしくは不幸になり得る。現在（というよりかなり前から）若い人に政治に対する関心が薄れているのですが、これは憂うべきことです。カトリックの神父は政治の問題に具体的な意見を述べることは禁じられているのですが、皆さんに政治に興味を持つように勧めることはできます。その一歩として現代社会の授業を大切にしてください。それからテレビや新聞のニュースを少しでも見るように。ただし、マスコミは世論を紹介しているというような顔をしながら自分の意見を世論のように流すことがあるので、眉につばして（嘘かも知れないと注意しながら）見て下さい。



さて、前回、もう忘れたかも知れませんが、このプリントで「考える」とはどういうことかを考えてみたいというようなややこしいことを言いました。そして、考える前に、まず周囲をしっかりと見る（観察する）ことが必要だ、とも。今回はこのことをさらに深めて行きたいと思います。

人はものを考える前に、「知らないといけない」と言っても反対はないと思います。では、ものを知るとはどういうことでしょうか。ここでちょっと脱線しますが、「ものを知るとは何か」というような根本的な問題を取り扱う学問を哲学と言います。この哲学という学問は古代（昔という意味）のギリシアという国で生まれ、のちにヨーロッパで発展（と言っても必ずしもいつも進歩したわけではなく退歩している面もあります）し、明治以降は日本にも入ってきました。存在とは何か、人間って何だろう、意味とは、目的とは、価値とは何かなど、人生を考えるとときに有用な（役に立つと言う意味）考えがあるので、いずれ総合の授業で説明したいと思っています。

もとの議論に戻りますが、「人間はどのようにしてものを知るのか」という問題について、二つの対立する意見があります。一つは、人間は最初は何も知らないが、成長するにつれ感覚（目や耳や鼻）を使って外の世界を知っていく」という考え。もう一つは「人間は生まれつき色々なことについての知識があるのだが、小さいときはそれに気がつかない。外からの刺激を受けて、眠っていた



プラトン（左）とアリストテレス（右）

知識が覚醒して（目覚めて）いくのだ」というものです。後者は想起説と言われ、代表者はプラトン（BC.427~347）です。前者の代表者がプラトンの弟子のアリストテレス（BC.384~322）で、「人

間の知性は何も書かれていない板のようなもので、経験をするによってその板に書き込んでいくのだ」と説明しました。君たちはどう思いますか。いずれ授業で話しますが、このプラトンとアリストテレスの師弟は古代ギリシア哲学の最高峰で、後世の西洋の思想に甚大な影響を与えたので、名前くらいは覚えておいて下さい。

プラトンの想起説は一見すると奇妙な考えに見えるかも知れませんが、人の物の知り方というのは、最初の一つ一つを覚えていくようですが、そのうち加速的にスピードを上げて、1を知れば10を知るといようなすごい早さで発展していくので、「これは生まれつき知性の中にデータがあったんっちゃうか」と思わせるのです。そこで、近代ではデカルト（1598~1650）や、最近ではアメリカの言語学者チョムスキーといった有名人もこの説を支持しています。

とは言え、アリストテレスの考えは常識的だと思われます。アリストテレスの最大の理解者であったと言われるトマス・アクイナス（1225~1274）も、また近代イギリスの経験論者たち（有名なロックはその一人）も同じ考えです（ただし、経験論者は人が外の世界を正確に知ることは否定する）。人間はまず体に備わった五感（目、耳、鼻、舌、肌）で外の世界を知り、そのデータを使ってものを考えると言って間違いないでしょう。

しかし、五感は何もしなくても（言い方を変えるとぼやっとしていても）働くわけではありません。例えば、みんながテレビのニュースを見たとして、後で「どんなニュースがあったの」と尋ねられて、「あれ、何があったのかな」と戸惑ったという経験はありませんか。それは「見ていたけど、見ていなかった」ということです。つまり、目は開いていて映像は網膜に映っていたけれど、それが何かを知ろうとする意志がなかったということです。

このことから出てくる結論は、「知る」ためには「知ろうとしなければならない」ということです。よく使われる言葉では、集中力です。授業でも目と耳はちゃんと開いていても、先生が何を言いたいのかを知ろうという気力がなければ、結局頭には何も残らない。かつて日本海軍に、日露戦争におおいに貢献した秋山真之（さねゆき。1868~1918）という名参謀がいました。司馬遼太郎の『坂の上の雲』は秋山好古（よしふる）と真之の兄弟の話です。真之は海軍兵学校を主席（トップ）で卒業するのですが、普段それほど勉強



海軍中将 秋山真之

しているようには見えないので、級友たちは怪しんで「おまえ、なんでそんなええ成績がとれるんや」と尋ねました。かれは「そんなもん簡単じゃ。先生の言うことをよよく聞いとれば、先生が何を大切に思うちよるか、わかる。それが試験に出るんじゃ」と答えたとか。

何でもかんでも知る必要はない。何でもかんでも見る必要はない。食べ物があっても、まずそれが体によいのか悪いのかを調べてから食べるでしょう。それと同じで、周囲にあるものがすべて精神によいわけではない。世の中には下らないものや精神に害になることも沢山あるので、そんなことは見る必要も知る必要もない。けれど知っておくべき重要なこともある。大切かどうかをまず見分け、大切と思ったら、しっかり見聞きして理解するように努めるのが、「よく考える」ことの第一歩だと言えるでしょう。このことをまず毎日の授業で実践してみよう。

2015年5月8日、尾崎